とある魔術の能力変化（スキルシフト）

リスペクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術の能力変化（スキルシフト）

【Ｎコード】
Ｎ７２３４Ｐ

【作者名】
リスペクト

【あらすじ】
――ある時、黒澤真也（くろさわしんや）はとある世界へ転生することになった。しかし彼が“死んで転生した”のか“生きているのに転生した”かははっきりしなかった。そしてこのことが後に大変なことに発展していくが彼はそんなことにおかまいなく、とあるの世界を精一杯生き続ける――
※主人公チート物です。嫌いな方はバックしてください。

転生！（前書き）

初投稿です。
駄文で見苦しいとおもいますがよろしくお願いします。

転生！

私(わたくし)こと黒澤真也(くろさわしんや)はただいま椅子などが乱雑している空間に存在している。

「どうなってるんだ……」

上条さんの真似をしながら現在の状況を確認する。

“空間”や“存在”など普通じゃ使わないであろう言葉を使っているのは状況が状況だからだ。

具体的な状況説明をすると

“足が床についていない”

“椅子などがふわふわ浮いている”

“身体が自由に動かない”

というなんとまあ怪しさ抜群の状況なのである。

どうせ夢オチだろうと思い頬をつねろうとしたが身体が動かないのを思いだしやめた。

「夢が終わるのを待つしかないか……」

と呟いたが……

「夢なんかじゃないよ、立派な現実だよ」

という高いとも低いともいえない高さの声が聞こえた。

「誰だ……？」

初めから警戒心バリバリだったが声を聞いた瞬間ＭＡＸに跳ね上がった。

「そんなに警戒しないで下さい。今姿を見せるんで。」

いや、声かける前に姿見せろよ！と思ったが口にはださなかった。

「どうも初めまして、神です」

……は？

ナニソレギャグデスカ？ワラエナイネ。ツウカアヤシスギルンダヨキミ？

「ごめんごめん、急に現れたら警戒するよね。次からは気をつけるよ」

そうだよ、次からは気をつけるんだよ？……ってちがーーう！！つーかコイツさりげなく思考読みやがった……。

「まあ、神ですからね」

どや顔をする自称神。

今更だがこの自称神は中性的な顔立ちで髪も中途半端な長さで男か女か分からないのである。

「早速ですが本題に入ります。あなたは“転生”できたらしたいと思いますか？自由に自分の設定を変えられて自分の好きな世界にいけるとしたら」

そんなの答えはひとつだ。

「本当にできるならばしたい。けど代償があるならばしたくないな」

答えはＹＥＳだが万が一のため聞いておく。

「大丈夫ですよ。特にこれといった代償はありません」

ならばＯＫだ、という感じのことを神（本当に転生させてくれるっぽいので自称ははずした）に言ったらここから選べと言われた。

黙々と探しているとお目当ての世界を見つけた。

「ここに転生できるか？」

「どれですか？……大丈夫です。できますよ」

なんだ、今の間は？まあいいか。俺の一番好きな世界に行けるんだからな。

「でも、この世界だと力がないとすぐに死にそうだなあ。どういう能力にしよう？」

こんな感じで悩んでいると神が

「つまりチート能力が欲しいんですよね。じゃあこちらが決めるん

で期待して待ってください。」

というので

「あ、ああ、分かった」

と返事をしておいた。というか約束違くね？

「よーし、それでは早速転生させます」

「おう！よろしく頼むぜ！」

というかこの体勢疲れた。直立不動って結構大変なんだな。

「それでは新しい世界で頑張って下さい！」

という神の激励を聞きながら俺は考えていた。なんで俺は転生することになったんだ？テンプレみたく死んだわけじゃないだろう、おそらく。いや、実は死んだのか？聞いてみるか。

「なあ、俺ってなん……」

聞こうとした瞬間視界がブラックアウトし始めた。転生開始ということか？まあ楽しく生きていければ転生の理由なんてどうでもいいか。

そう思いながら俺は意識を手放した。

転生！（後書き）

どうでしたでしょうか？これからもっと精進していくつもりです。
明日できたら投稿します。

真也の能力！（前書き）

第二話です。短い＆駄文ですいません。執筆に慣れたら長くしたいと思います。

真也の能力！

私(わたくし)こと黒澤真也はただいま“とある魔術の禁書目録”の世界へ転生したばかりなのに早速厄介事に巻き込まれております。

我ながら不幸だと思うよ。転生に成功したのは喜ばしい事だけど、転移先が真っ昼間からシャッターを降ろした銀行の前。この状況……“とある科学の超電磁砲(レールガン)”の第一話とそっくりだな……。ということを考えていると案の定銀行の入り口が爆破され、三人組の男が出て来た。（俺は爆発にぎりぎり当たらない所に避けた）

「ヨッシャ！！引き上げるぞ、急げ！」

「ウス！」

なんて会話をしながらこちらに向かってきた。というかあのデブの髪型は正直ないと思う。髪をいくつかに束ねて後ろに流している、いつの時代だ！？とツッコミたくなる。詳しくは原作読んでみればわかる！あとの二人は特筆すべき変な所はない。

なんて事を考えていたらデブが邪魔だー！といいながら突っ込んできた。わざわざぶつかる必要もないので避けてやった。相手をしてやってもよかったが、まだ自分の能力が分かってないのでやめておいた。それに御坂美琴と白井黒子の二人が解決するだろうからな。

『あなたも手助けすればいいじゃないですか。というかあなたの能力を試す良い機会ですからしてください』

突然誰かの声が聞こえた。

「その声は……神か？」

高いとも低いともいえない高さの声だからな。一度聞けば忘れないほど独特な声なのである。

『ええ、当たりです。あなたのこの世界での設定の説明をしようと思いこうして話しかけているのです。あ、あと私と話す時は頭の中で考えれば話せるので。』

『分かった。あと早くしたほうが良さそうだぞ？なんかもう終わりそう終わりそうだ、事件』

白井が発火能力者（パイロキネシスト）と向かい合っている。

『分かりました。では説明しますね』

この神の説明を要約すると

・能力名は“能力変化（スキルシフト）。見たことのある能力を自由に使え、レベルも自由に変えられるそうだ。うわ、チートだ、チート。どんな化け物だよ。しかし能力測定（システムスキャン）では無能力者判定を受けるらしい。上条さんの幻想殺し（イマジンブレイカー）と同じような感じか。

・上条さんと同じ学校らしい。しかも同級生に同じクラスときたもんだ。どんなご都合主義だよ。寮も上条さんと一緒の所らしい。

とまあ、こんな具合である。……あえてもう一度言おう。

“チートすぎるーー！！なんというご都合主義ーー！！”

『まあチートすぎますけど、そのかわり代償があります。それは……』

『それは……？』

ゴクッと息を飲み答えを待つ。

『上条当麻みたく不幸体質になってます』

おそらく笑顔で言っているのであろう、語尾に音符マークがついている感じがした。

『……上条さんと設定かぶっちゃってるよ！？ちょっとそれはまずいのではないでしょうか！？もっと他になかったのか！？』

ちょっとこれはマズイと思い抗議したら

『じゃ、頑張ってね～』

と言われ逃げられた。くそ、あいつ、今度会ったら一発殴ってやる。

ふと白井と発火能力者の方を見ると発火能力者が手に炎をまとい、白井に殴りかかっていく場面だった。

発火能力者の炎を見ていたら頭に痛みが走った。どうやら能力変化を使用しているようだ。

「早速能力を使ってみるか……」

能力：発火能力者、レベル：５　に設定。

足から炎を噴射し車に乗って逃げようとしている奴の所に向かった。

「チッ、あんなの相手にできるかっ！」

俺は車に乗って逃げようとしている。仲間はすでに捕まり、空間移動能力者もいる。ここは逃げるが勝ちだ！と思い乗り込もうとしたが、誰かが飛んできて車を壊してしまった。

「だ、誰だ！」

「俺か？俺はただのしがない転校生さ。」

炎上している車の中から人（化け物）が現れた。

おーおー、面白いぐらいに動揺してるな。念のためもう一発脅しておくか。

「動くなよ？動いたらお前を骨まで焼き尽くすぞ？」

手に炎を出し、脅した。

「ひぃっ！」

強盗は恐怖のあまり縮み上がってしまったようだ。

「逮捕のご協力感謝致しますの」

後ろから声が聞こえた。ん？この声は、白井か？

「どういたしまして」

初対面なので、とりあえず返事をしておいた。

「早速ですが……」ガシャッ！

「うん？」

手を見てみると、手錠を着けられていた。は？なんで？

「あなたを公共の場での能力使用、また脅迫の現行犯で拘束します！」

……まじですか！？

真也の能力！（後書き）

誤字・脱字がありましたらご指摘下さい。

戦闘狂（バトルマニア）！（前書き）

第三話です。前回よりもちょっと長いです。

戦闘狂（バトルマニア）！

お、落ち着け、俺！深呼吸だ！すう～、はあ～、すう～、はあ～。よし、落ち着いたか微妙だが落ち着いた！

「ちょっと黒子！なんでその人を捕まえるのよ！銀行強盗逮捕に協力してくれたじゃない！」

白井に突っ掛かったのは、常盤台中学が誇る電撃使い“超電磁砲（レールガン）”こと御坂美琴である。白井に“お姉さま”と呼ばれるほど心酔されているのである。

「お姉さま、逮捕する理由は先程述べた通りですの。いくら逮捕に御協力してくださっても、風紀を乱すようならば関係ありませんの」

確かに正論だ。俺がこっち（悪者）側じゃなければ賛成してるな。つーか俺は悪者じゃねえしっ！

「それではついて来てくださいな」

白井が俺の手を掴み歩きだした。御坂は後ろからついて来ている。あとなんか御坂の方から殺気立った視線を背中に浴びている。解放されたら上条さんみたいに喧嘩を吹っかけられそうだ。

「うだ～、不幸だ……」

と、俺は思わず呟いた。

所変わって柵川中学の風紀委員（ジャッジメント）一七七支部（だったっけか？詳しくは覚えてなかった）。ここで俺は事情聴取を受けていた。

「あなたのお名前を教えてくださいな」

「……」

俺は黙秘している。名前さえ言わなければ書庫（バンク）で検索されないはずだ。

「黙秘ですか……。そんなことしても意味ないですわよ？」

白井が冷めた目でこちらを見ている。御坂は相変わらず殺気立った視線を俺にぶつけている。

「……」

が、俺は辛抱強く黙秘を続けている。

「はあ、これではラチがあきませんの……」

白井が手を額に当てながら呟いた。転生（転校）初日から前科を作るのはカンベンだからな。

「ねえ、アンタ。私と勝負しない？」

いきなりなにをいいだすんだこの電撃嬢は？

「もし私に勝ったら今回の事件見逃してやってもいいわよ？」

高校生に対してなんという上から目線……。だが心の寛大な俺はスルーし、了承の返事をした。白井が勝手に決めないで下さいまし！とか言っていたが御坂が

「今度何か買ってあげるから」

と言ったらあっさり陥落した。

「じゃあ場所を変えるわよ」

と御坂が言ってきた。

「どこでやるんだ？」

と聞いたら

「河原よ」

と返事がきた。河原、ねえ。いつも御坂と上条さんが喧嘩してる所か？

どうやら的中したようだ。着いた所は上条さんと御坂がいつも喧嘩している河原だった。

「ここなら思いっ切り能力を使えるわよ」

いやいや、きみここで雷落として、ここら一帯の家電製品ダメにしたじゃん。と思っていると電撃矢が飛んできた。慌て避けると御坂の手から連続で電撃矢が放たれた（白井は審判をやっている）。

「ドンドンいくわよ！」

と御坂は言っているが、こちらとしては早く終わらせて生上条さんに会いたいのである。

「はあ、めんど……」

と言いつつ能力を発動した。

能力名：電撃使い
レベル：5

に設定。飛んできた電撃矢と同じ威力にして相殺した。

「なっ……」

「うそ……」

白井と御坂が口を大きく開けて驚いている。なんだ？

「「多重能力者（デュアルスキル）！？」」

ああ、そうか。さっき発火能力を使って、今電撃使いを使ったからか。だが……、

「俺はそんな大それた能力は持ってないぜ！」

そうなのだ。いくらこんなチート能力を持っていても、公式では無能力者扱いなのである。

「「嘘つけっ！！」」

おお、見事にハモったな。

「いいのか？そんなに余裕そうにしていて」

俺は地面から砂鉄を能力を使い取りだし、剣を作った。御坂が上条さんと喧嘩した時に使っていたものだ。ちゃんと振動もしている。

「おもしろいじゃない！私に電撃使いの能力で挑むなんて！」

どうやら御坂も砂鉄剣を作ったらしい。

「フッ！」

俺は砂鉄剣を御坂に向かって投げた。

「そんなの意味ないわよ！」

投げた砂鉄剣は砂鉄に戻された。時間さえ稼げればいいんだよ。俺は、

能力名：発火能力者

レベル：５

に設定。炎を出し、それを剣の形にした。

「砂鉄でできた剣じゃこの炎剣には勝てないぜ？」

「くっ、なら……！」

飽きもせず電撃矢を飛ばしてきた。それに対しこちらも炎でできた矢を飛ばした。

「ふむ、同じ程度の威力か……」

双方の矢は相殺された。

「しぶといわね……」

そりゃまあ、当たったら死にそうだからな。必死になるわ、嫌でも。

「そろそろ本気出せよ。遠慮なんてしてんじゃねえ」

明らかに御坂は手加減している。どう考えても威力が弱すぎるからな。まあこちらも多少手加減しているが。

「気付いてたか。なら本気でいかせてもらうわ」

御坂はポケットからコインを取り出した。ん？コイン？……まさか、超電磁砲を使うつもりか！？

「いくわよ……」

どうやら本当に超電磁砲を使うらしい。

「ちょ、まっ。それ喰らったら死んじまうわ！」

必死にやめさせようとしたら冷たい返事をもらった。

「アンタなら大丈夫そうじゃない？」

そういう問題なのか！？ってか何故に疑問形！？とりあえず死ぬのはカンベンなので炎を手と手の間に作った。か○は○波的なことをしようとしているのだ。

そして両者から赤色と青白い光線が放たれた……。

「うが～、不幸っす……」

結局御坂との喧嘩は引き分けに終わった。超電磁砲と俺が放ったファイヤービームは（命名力がないって？そんなの分かってますことよ）相打ちに終わりその後は相打ち合戦になり、俺も御坂も疲れたから続きは後日ということになった（結局今回の不祥事は見逃してくれることになった）。そんなこんなでただいまのお時間夜の十一時。これから住むことになる寮に行き、まだ起きていた大家さんに挨拶をした。大家さんの話によると、

「この時間帯なら大抵みんな起きているから、お隣りさんに挨拶をしときなさい」

ということなので、挨拶しにいくことにした。

「すいませーん、起きていらっしゃいますかー？」

ドアをノックし返事が来るのを待った。……寝てるのか？と思っていると、

「はーい、ちょっと待ってくださーい」

ん？この声は……まさか、まさか……、

「はーい、どちらさまですか？」

生上条キターーー！！あ、俺は同性愛者じゃないよ？一人の男として上条さんを尊敬しているのですよ。

「どうも初めまして、隣に引っ越してきた黒澤真也です。以後お見知りおきを」

マズッターー！ついつい堅苦しくなってしまった！

「そんな堅苦しくしなくてもいいぜ。俺は上条当麻だ。これからよろしくな」

上条さんが手をだしてきた。やっぱアンタ神だよ！

「分かった。改めて、これからよろしく」

俺も手をだして握手をした。

「あ、そうだ。明日、学校がどこにあるか分からないから一緒に行かないか？」

この理由もあるが、最大の理由は上条さんと親密になっておきたかったからだ。俺も上条さんと同じく不幸体質になってしまったし、なにより原作介入しやすくなるからな。

「おう、いいぜ」

「ありがとう」

うう、本当に優しいっす……、どこかの電撃嬢と違って……。心の中で泣いていたが、どうやら表に出てしまっていたようだ。

「お、おい、大丈夫か？」

といいながら心配してきた。やめて、これ以上俺を泣かさないで！

「いや、転せ……転校初日から不幸な目に会ってしまって……。今日初めて人の優しさに触れたよ……」

つい本音を吐露してしまった。

「お前も苦労してるんだな……」

上条さんが俺の肩の上に手をおいて同情してくれた。うう、原作読みながらあなた様の不幸を笑っていて、本当にすいませんでした！

戦闘狂（バトルマニア）！（後書き）

上条さんのキャラ壊れているかも……。
相変わらずの駄文ですいません。

能力測定（システムスキャン）１！（前書き）

どうもおはようございます、こんにちは、こんばんは。まず注意！真也がやや壊れています。あと他マンガのネタを丸パクリしてしまいました。それでもいいかたはどうぞ！

能力測定（システムスキャン）１！

転生二日目の本日の日付は七月十七日。俺のこの世界での初登校の日である。

「上条～、起きてるか～」

昨日、一緒に学校へ行こうと約束したため、上条さんを起こしに来ているのである。

「お～う、ちょっと待っててくれ～」

お返事が帰ってきたが、

「ぬをっ！？今日の宿題のプリントは何処へ！？」

「あーー！？た、卵を……、踏んでしまった……」

などの悲惨な声が聞こえてきた。

「不幸体質はいまだ健在、か……」

ぼそっと呟いた。

「わりぃ、遅れた……」

うわぁ、上条さんの全身からめちゃくちゃ負オーラがでていた。だがしかし、俺も上条さんに負けないぐらい負オーラを発しているの

だよ！
「……どうした？」
「いやいや、なんでもありませんのことよ？どこぞの電撃嬢と喧嘩（強制）して、さらに食料を買い忘れて昨日から一食も食べてないなんてこと？」
そんなことを言っている俺の目からきらりと光る液体が落ちた。
「それは……なんというか……って電撃嬢！？真也は御坂に会ったのか！？」
俺は指で丸を作った。
「喧嘩したって言ったよな？どうなったんだ？」
いささか厳しい目で見てくる上条さん。
「引き分けだよ……。大体昨日学園都市に引っ越してきたばかりなのに、能力使ってくるってどういうことだよ。まさか！？死ねということなのか！？」
「そんなわけないだろ！にしても、御坂はそんな奴じゃないはずだがなあ。なあ真也、お前なんか能力使ったんじゃないか？」
「能力があるかないかは今日の能力測定（システムスキャン）で分かるだろ？」
「まあ、そうだな」
今日は期末の能力測定（システムスキャン）の日なのだ。普通ならば自分の能力がどうな

るか不安になったりするが、俺は神からどんな結果になるか教えられているため、全くない。

「どんな結果になるか知ってるみたいな感じだなあ」

「ハハハ、ソンナワケナイジャナイカ。ソウイウカミジョウクンハドウナンダイ？」

「ハハハ、ワタクシハマンネンレベルゼロノオチコボレデスヨ？」

片言になっている俺達二人。まあ、道中周りの人から変な目で見られていたということは書かなくても分かるだろう。

歩くこと数十分。俺達は上条さんが通っている高校の校門の前にいる。

「なあ、上条」

「ん？なんだ？」

「俺さ、どこ行けばいいんだ？」

「ん～、とりあえず職員室じゃね？」

「……どこ？」

「……は？」

仕方ないじゃん！学校の資料なんてあるわけないし！つーかそれぐ

らい用意しとけよバカ神！！

「はあ……仕方ねぇな。一緒に行ってやるよ」

嗚呼、これで何十回目だろう、この御仁を神と思ったことは。

そんなこんなでただいま職員室で担任になるであろう小萌先生に会っている。

「は～い、真也ちゃんですね？今日からあなたの担任になる小萌です。よろしくお願いしますね～」

ピ、ポ、パ、ポ。

「あ、もしもし。警備員（アンチスキル）ですか？明らかに小学生の子が教師を名乗っているのですが。」

「うぉーい！！やめんか！？」

通話していた携帯は上条さんに取られ、切られた。

「ありえん！こんなどこから見ても小学生な子が教師！？は！信じられるか！そうだ、俺は昨日改めて思ったんだ！所詮現実（リアル）は現実（リアル）！お嬢様学校のトップが戦闘狂（バトルマニア）！信じられれん！どーせこれもそうなんだろ！？」

この時の俺は、原作を見ていながらも小萌先生のことをすっかり忘却の大地に置いていた。

「お、落ち着け、真也！小萌先生が泣きそうだ！」

「うっ、ぐすっ」

「どーーー考えても小学生だろ！？これぐらいで泣くってどういう神経だよ！」

上条はこの時思った。お前の神経がどうなってるんだ！？と。

「う、うぇ～。ひぐっ、ぐすっ」

本格的に泣き始めた自称先生。残念だが、俺の心は絶対零度の冷たさで出来ているから、涙ぐらいでは揺るがんのだよ！

「お、俺はもう知らん！！」

上条さんが超特急で職員室から出ていった。そして言い忘れていたが、俺と上条さんは、この自称先生が泣きだしそうな頃から周りの先生方に睨まれていた。そして、上条さんがこの戦場（？）から逃げ去ったため、その視線は俺に向かってくる。痛い、痛いです。

「ふえぇ～。あう、ぐすっ」

まだ泣いてるよ、自称先生。はあ、仕方ない。

「そんなに言うなら見せて下さいよ、教員免許。本当に教師ならあるはずだ。そしたら教師って理解しとくから」

この台詞の重要点は　　しとく　だ。ここ、テストに出るよ！

「うぅ、分かりました。どうぞなのです」

「……」

今小萌先生から渡してもらったものは、完全に教員免許だった。

「すいっませんっしたーーー！」

もちろん俺は土下座をした。は？プライド？なにそれおいしいの？

「いえいえ。分かってくれたら嬉しいのですよ～」

よかった、許してくれた。

「それでは、行きましょうか」

「はい」

しばらく小萌先生から諸注意を受けていたら、予鈴がなったため、教室に行くことになった。うぅ、緊張するなあ。

「ではこちらで待っていて下さいなのですよ」

「了解しました」

ドアが開けられ、小萌先生が入ってきた。

「なあなあかみやん。今日来る転校生の子って女子なんやろか？」

「にゃー、おれっちも気になるぜい」

エセ関西人こと青髪ピアスとシスコン軍師こと土御門元春が転校生について俺に聞いてきた。にしても、こいつらの情報はどこから来るんだ？普通こういうのは先生が言って初めて知るものじゃないか？俺がそういうのに鈍感なだけか？

「残念ながら男だ」

「そ、そんな……」

「にゃー、つまんねいぜい」

青髪ピアスがまさに真っ白になっている。あと土御門、そんなことを言うんじゃありません。

「はーい、それではビッグニュースで～す。今日転校生がこのクラスにやって来ま～す。それでは入ってきてもらいましょう。どーぞなのですよ～」

……。

あれ？

「？どーしたのですか～」

転校生（真也）が教室に入ってこない。あいつは恥ずかしがりやってタイプじゃないはずだがなあ。

小萌先生が廊下に出た。

「きゃあっ！？どどど、どーしたんですか！？」

小萌先生が悲鳴をあげたと思ったら、人らしき物体を引っ張ってきた。

今俺は小萌先生に引っ張られて教室に入ってきている所だ。ただの物体として。

「ううぅ、不幸だ……」

まずいと思いながらもついつい口に出してしまう。

「大丈夫ですか？真也ちゃん？」

ちゃん付けはやめてほしい……。というか、クラスのみなさんの視線が痛い……。

「どうしたんだろ？」

や

「また個性的なキャラの持ち主が……」

や

「かっこいい……」

などの声が。ってちょっと待て！最後のは聞き捨てならん！俺は目立ちたくないんだ！そういうことを言うと……

「……」

ほ～ら、クラスの男子から人を射殺せるような目が俺に向けられたよ……。

「え～、先程トラブルに会いまして、入ってこれませんでした。すいません」

俺が謝ったら男子からは、

「ちっ、初日から問題起こすって、大丈夫かあ？」

明らかに喧嘩売ってるとしか思えない言葉が。つーか問題起こしたわけじゃねえ。女子からは、

「かっこいいから全然気にしないよ！」

という声が。ああ、目立ちたくないという理想が崩れていく。

「そ、それでは自己紹介をお願いするのですよ」

どうやら小萌先生もこの混沌とした空気に呑まれそうになっている。

「はあ、分かりました。名前は黒澤真也。趣味はギターを弾くこととアニメ鑑賞です。望むことは平・穏・です！」

俺の一番望むことを強調して言った。

「それでは真也ちゃんは、上条ちゃんの隣の席へどうぞなのです」
脱力しながら俺の席となる机へ向かう。
「よっ。」
上条さんが手をあげて挨拶してきた。しかし、俺はそれにも答えられない。無事に席についたらすぐさま突っ伏した。
「お、おい。大丈夫か？」
ダイジョウブ？ナニソレオイシイノ？
「完璧に壊れちゃってるよ……。あ、今なら紹介できるかな。真也、俺の友達の土御門と青髪ピアスだ」
「かみやん、壊れている時にしか紹介できない友達って……」
「……」
土御門は落ち込んでおり、青髪ピアスはこちらを睨んでいる。
「しょうがないじゃないか。変態野郎どもをまっとうな人間に紹介できるか」
「なっ、失礼な！おれっちは義妹一筋だぜい！」
「そうやでかみやん！ボクもただ女の子の守備範囲がちょーっと広いだけやよ」
義妹？守備範囲？俺の中のオタク魂に火がついた。

「義妹？守備範囲が広い？ふざけるなあーーー！」

「のわっ！？」

つい叫んでしまったが、俺は止まらない。

「義妹だと？はっ！ふざけるな！義妹を妹とは呼べん！貴様らに重要な言葉を教えてやろう！

妹の　品質示す　エンブレム　ＢＭＷ

（ｂｙけいま）」

「は？」

クラスのみんながぽかんとしているが構うものか。

「これは妹が妹であるための基本条件。まずＢＬＯＯＤ血縁！！血がつながっていること！！義妹とか！！妹分みたいな！！軟弱キャラは所詮たーにーんたーにーん！！そしてＭＥＭＯＲＹ二人の思い出！！家族ならではの質量そろった思い出！！これぞ兄妹の代えがたい絆！！なにより兄をうやまう心。ＷＯＮＩＣＨＡＮＭＯＥヲ兄ちゃん萌え！！」

明らかに引いているな。だがこれでいい。俺は目立ちたくないんだ！（客観的にみたらどう考えても目立っているが）

「そして守備範囲が広いだと？おふざけが過ぎるぞ！真（まこと）の人間はちゃんと一つに絞るんだよ！大抵守備範囲が広いって言う奴はなあ！

いい加減なんだよ！全体的に！」

土御門と青髪ピアスは地に伏している。

「真也……、お前だけはまともだと思ったよ……」

上条さんが失望の声色を隠しきれずに言った。クラスのみなさまから冷たい視線を受けながら俺は勝者の顔をしながら席に着いた。

能力測定（システムスキャン）１！（後書き）

すいません！前書きで書き忘れました！更新遅れてすいません！次回は一週間以内には書きたいと思います。

能力測定（システムスキャン）２（前書き）

ごめんなさい！！

約束を破ってしまいました……。言い訳をするのならば、テスト勉強で忙しかったとしか言えません……。以後こういう事が起きないように注意します！

今回はちょっと短めなので、できうる限り早く次話を投稿したいと思います。

能力測定（システムスキャン）2

私（わたくし）こと黒澤真也はただいま上条さんが通う学校のデルタフォースの二人と激しい論争をしていた。めちゃくちゃバカな、な……。

「にゃー！義妹というのは一つの属性なんだにゃー！これはなんとしてもゆずれんぜい！」

「なんて失礼な！ボカァ様々な属性を持つ女の子を受け入れる寛大な心を持ってるんよ！？」

「ふ、青いなバカ共……。貴様がシスコン軍師？笑わせるな。義妹は他人だ。シスターコンプレックスの対象にはならない」

土御門を指差し持論を言い放つ。

「そしてそこのアホ面。貴様は論外だ。にゃーにゃー星人のほうが百万倍マシだ。貴様には何も言わん。自分で考えろ」

言い終わった後ハッと我に返ったら、周りの人が様々な目で俺を見ていた。ある人は苛立った目で、ある人はまたか……、という目で、ある人はホッとした目で、ある人は恍惚とした目で……ってなんでだーーー！

そんな騒動の最中、小萌先生は泣きながら教室から出ていったらしい（クラスのみなさんはアホ論争を見ていたため詳しくは分からない）。

「なあ、上条……。俺はどうすればいいんだろう……」

「ああ……。まともな人間だと思ってた……。そんな幻想は跡形もなく崩れさっぐぇっ！」

上条さんの最後のうめき声は俺が腹を殴ったからだ。

「何するんですか黒澤さん！？」

「俺はまともだ。ただちょーっと変わってるだけだ……」

「ウソだ！まともな人間だったらあんなアホ論争をするわけ、げふっ」

「オ・レ・ハ・マ・ト・モ・ダ・ヨ？」

「い、イエッサー……」

俺の迫力に圧されたのかカクカクと首をただ上下に振っている上条さんだった。

「どうすればって言われてもなあ……」

色々あっても結局助けてくれる上条さんはやっぱり神のような人間である。

「みんなからは無下にはされないと思うが、親しい付き合いにはならないだろうなあ」

上条さんは顎に手をやり、うんうんと唸っている。やっぱり俺はデルタフォースの一員になるしかないのか……？

「お～。いいこと考えたぜ？」

「どんな！？」

今の俺は藁をも掴む思いですよ？

「自分で言うのもなんだが、デルタフォースの一員にぎゃふぅっ！」

今までの中で一番強く殴っておいた。がっかりだよ、上条くん。

「おぉ……ぅ、な、なんか黒澤さんデンジャラスになってませんか……？」

「がっかりだ……」

俺は冷ややかな目で上条さんを見た。

「な、なにが……？つーかそれはこっちの台詞じゃー！おまげふっ……」

もう五月蝿いので気絶させておいた。あ、ついでに上条さんの私的ランキングが一位から十位くらいに下がった。

はあ。仕方ない、腹くくりますか！

俺はデルタフォースの人と仲良くなるために、昼休みに土御門と青

髪ピアスに会いに行った。が、ものすごい形相で俺を睨んできた。
ここで折れては駄目なのだが、あまりの怖さに……、

「し、失礼しました……」

……仕方ないじゃないか！生でみれば分かるよ！？今から俺を殺すのか！？って思う程だったよ！

俺が落ち込んでいると、二人はハイタッチをしているようだった。
俺、なんかした？いや、正論を叩き込んだだけだよ？

「あの……く、黒澤、くん？」

どうやら俺を呼んでいるようだが、今俺は落ち込み中なんだ。ほっといてくれ……。

「嗚呼……、どうすればいいんだろ……。転校初日にクラスの大半からドン引きされるし、しかも話しかけたら、睨まれるし……。やってけるのかな、俺……」

小声で呟いていたら、話し掛けてきた人が何を思ったか、

「は、話を聞いてくださーーーい！！」

と叫んだ。かなりの至近距離だったので、

「うぉ～……」

耳を押さえて転げまわるのはおかしくない、はずだ。

「あ、ご、ごめんなさぃ……」

なんか今にも泣きそうな声色だったので跳ね起きて、

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

と極上の笑顔（自分的に）て言ったら、

「ひゃっ、ひぅ～」

奇声をあげながら倒れた。

「おっ、おい！大丈夫か！？」

改めて話し掛けてきた人物を見ると、女子生徒だった。……待てよ、そういえば話し掛けてきた人をスルーしてたよな。そしてその人物がこの女子生徒……。ということは、俺は女子をスルーしていたということなのか！？今クラスの皆様からどのような目で見られているか予想がつくよ。きっと“蔑み”の目に違いない。恐る恐る顔をあげると予想に反した光景（？）が広がっていた。男子からは嫉妬の目、女子からはポーッとした目で俺を見ていた。

何か嫌な予感がしてきたぞ、おい。

「野郎どもぉ！新入りを徹底的に潰すんだにゃあ！」

『うおぉーーー！！』

土御門がいきなり立ち上がり、声を発すると、男子全員がそれに応えた。

「んなっ！潰すって、つまり、殺すってことなんでしょうか……？」

この後、なにが起こるかを想定して、少しずつ後ずさり、教室の入口に近づく。

「にゃー。大丈夫だぜい。息の根は止めないから」

「そうそう、ただ社会的に殺すだけやで～」

「結局殺すんじゃねーか！」

そう言い残し、ダッシュで教室から逃げ出そうとしたが、ある人物に阻まれた。

「……」

「あの……上条、さん？」

そう、ある人物とは上条さんだったのである！

「……す」

「はい？」

何か言ったようだが、小さすぎて聞こえなかったため聞き返した。

「潰す……」

……え？

「俺が殴られたのを五倍にして還元してやろうではないか！」

迷惑だーーー！と、心の中でツッコミながら、どうやってこのカオス空間から逃げるかを考えている。

『ふっふっふ……』

「潰す……潰す……」

ちょ、上条さん怖いっす！A級犯罪者並に！！

そしてこの時、救世主が現れた！

「はいは～い。転校生と仲良くするのはいいことですが、今日はシステムスキャンの日なので、ちゃっちゃと移動しちゃって下さいね～？」

救世主はご覧の通り、小萌先生であった。マジで助かった……。あと数分遅かったらきっと俺はヤバいことになっていただろう。

「チッ、小萌先生に救われたな、新入り」

「にゃー、惜しかったぜい」

「そうやなー」

「真也、復讐は終わってないからな？」

上から順番に、モブ男子、土御門、青髪ピアス、上条さんである。

……上条さん、キャラ変わってるし……。俺はため息をつきながら移動し始めた。

能力測定（システムスキャン）２（後書き）

誤字・脱字があったら知らせてください。

能力測定（システムスキャン）３！（前書き）

すいません、今回短文です。あと若干、いやかなり中二病的です。

能力測定（システムスキャン）３！

さて、今の俺のカオスな状況を詳しく説明しよう。え？聞きたくない？ハハハ、聞いて下さい！お願いします！誰かに言わないと気が狂い死にそうです！

……落ち着いたので、改めて説明しよう。まあ、簡単に言うなら（詳しくって言ったのにしていないとは言ってはいけない）……何故か、ナゼか女子生徒がぞろぞろとついて来るのだ！目立つ、めちゃくちゃ目立つ！俺の『穏便な転生生活』が……。しかも、男子生徒からは嫉妬の視線の嵐！つらい、死ねる……。

目的の部屋に着いたようである。にしても、様々な生徒が転校生の能力測定を見ようと集まっている。測定なんか見てなにが楽しいのか。

「こんちはー。黒澤真也です。よろしくお願いします」

普通に挨拶をし、指示があるまで大人しく待っていることにした。

「すまないな、待たせてしまって」

おそらく今回の測定の責任者なんだろう。白衣を着た女の人で、なかなか美人であった。どうでもいい？ごめんなさい。

「ふむ、どうやら能力測定は初めてのようだな。それでは、どんな能力か調べないとな」

もしかしてそれって、薬とか投薬されたりするのか？嫌だなあ。というか体をいじられるのが気に喰わない。

「いや、大丈夫ですよ、一応能力っぽいのを使えるんで」
「ほう……。学園都市でカリキュラムも受けずに能力を使用できるのか。実に興味深い……」
うん、とりあえず、システムスキャン終わったらダッシュで逃げよう。我が身のために。
「それでは、いったいどのような能力なのかな？」
「そうですねぇ、確か発火能力者ってやつらしいですが」
ここは無難な能力にしておこう。といっても二つしか持ってないが。
「それでは測定を開始する。手に炎を出してくれ」
白衣の美人さんに言われた通りに炎を出した。あれ？炎が大きくなったり、小さくなったりしている。もしかしてこれって……？
「うおっ！？」
刹那、炎が爆発的に大きくなり、俺の体を包み込んだ。
「なっ……！？まずい、能力の暴走か！？」
見学者からは悲鳴が聞こえてくる。
「大丈夫か！？真也！！」
焦った声で教室に入って来たのは、ただいま私的ランキング降格中

の上条さんである（笑）

「今助けてやるからな！！」

いや、特に熱くないんすけど。つーかこの能力の暴走、絶対神の仕業だよな？今度会ったら五、六発殴っときますか。

「うおぉぉーー！！」

上条さんが炎に向かって右手を突き出す。そういえば、原石ってコピーできんのか？

パリィン！

ガラスが割れるような音が聞こえてくると、凄まじい激痛が頭を襲った。

「ぐ、ぐわあぁぁぁ！！が……」

「おい！真也！大丈夫か！？」

上条さん、うるさいっす……、頭痛が悪化しそうです……。そんなことを考えながら、俺の意識は途切れた。

目を開けてみると、暗闇が広がっていた。あれ、もしかして俺、死んだ？

「あなたは死んでいません。安心して下さい」

俺の記憶に保存されていない声が聞こえてきた。本当なら、ここで「誰だ！？」とか言うのだろうが、死んでいないと聞いて、安心していた最中だった。つーか姿見せろ。

「ここは『無』という場所です。」

……ホワッツ？

「そうですね。分かりやすく言うのなら、宇宙が誕生する前の存在です」

爆弾投下～。酸素ないのにどうやって生きてんだよ、俺？

「酸素がないのに呼吸できるのは、あなたの精神世界だからです」

あれ～、なぜ呼吸できるかはわかったけど（考えを読んだことはスルーしとこう）、なんでこんな物騒そうな場所が俺の精神世界にあるんだ？そしてあんたは誰？

「ふむ、この場所があなたの精神世界にあるのは、あなたが稀有なる存在だからでしょう」

稀有？転生者ってことか？

「まあ、知らなくても支障はないです。そして私は……」

目の前に何かが集まっていく感じがした。が、それを目視することはできなかった。そして、後に俺の人生を揺るがす第二の人物がその姿を現した。

「私の名はスイレン。この場所と共に生きる存在。そして、力を与える者」

黒髪、黒目、髪型は手入れをしていないのか、ところどころ跳ねている。が、そんなことも気にならない。なぜなら……、

「綺麗だ……」

そう、器量が良いというのか分からないが、何か人を引き付ける魅力がある。その魅力に思わず俺は呟いていた。

「さあ、本題に入りましょう」

そう言われ、ハッと気付いた。

「単刀直入に言います。私を、いえ、この場所をあなたの精神世界に置いてくれませんか？」

へ？どゆこと？確かここも精神世界なんだよな？じゃあ別にいいじゃないか。

「この精神世界は裏の世界です」

裏？オモテウラのウ？

「はい。裏の精神世界というのは、特別な状況下でない限り、入っ

てこれない場所です。表はいわゆる意識下のことですね」

はあ……。もし意識下に置くと仮定して、その時のメリットとデメリットは？

「メリットは、先程の自己紹介で述べました通り、『力』を与えます。デメリットはありません」

そんなウマイ話があるかっ！！第一、俺はもうチートな能力を持ってるんだ。それだけで十分さ。

「そうですか……。それでは、今回は諦めます」

……え？“今回”は？

「それではあなたを現実世界に戻します」

その言葉を聞きながら、俺の意識は沈んでいった。

……なーんか、嫌な予感がする……。

能力測定（システムスキャン）３！（後書き）

はい、さらなるチートへのフラグです。

次回から原作です！

禁書目録（インデックス）！（前書き）

また遅くなりました……。できる限り速くしているのですが……。

さて、約一週間ぶりの新話です！今回は長めなので、楽しんでいって下さい！

……目を開けると、俺の部屋の天井が見えた。さてさて、さっきまでやけにインパクトのある夢を見ていた気がする。だが、いまいち内容を思い出せない。嫌だねぇ、こういう感覚。もどかしいね、うん。
ふと時計を見てみると、短針は四時を指していた。どんだけ寝てたんだ俺？そういえば、何故俺はここにいるんだろう？まあ大方上条さんが運んでくれたんだろう。感謝です。今日は終業式の日だったはずだ。つまり原作が始まるということ。そして今日の一大イベントは上条さんと御坂の喧嘩だな。う～ん、一応会っといたほうがいいのだろうか？だが、会ったらこちらに飛び火してきそうだ（主に上条さんの不幸が）。

そんなことを考えていたら朝飯の時間になったため、２０分程かけて食べ、上条さんを迎えにいった。なお、朝登校するときは上条さんと一緒に行くということを昨日話していた。
ドアをノックし、上条さんが出てくるのを待った。

「はいは～い。ん？真也！身体は大丈夫か！？」

うぐっ……。朝からうるさいですよ、上条さん。

「ああ、大丈夫だ。心配かけたな。そういえば昨日どうなったんだ？何故か起きたら俺の部屋にいたし」

「ああ、それはな……」

上条さんの言うことをまとめると、

・俺が倒れた後、下校時刻になっても起きなかったため、上条さんが運んでくれた

・能力測定の結果は無能力者扱い

・理由は、炎を出せても、コントロールがまったくできず、温度も感じられなかったためらしい

ということらしい。一応予想通りだな。

話を聞き終えて、学校に向かい、何事もなく無事に着いた。ただ、気になる点が一つ……。

「（なんか、居心地が悪い……）」

そうなのだ。昨日の一件から、女子からは興味津々な、男子からは嫉妬のという視線を感じ、教室にいたらストレスで胃に穴が空きそうな程だ。

「かみじょ～う、ヘルプゥ……」

上条さんに助けを求めたが、気付かず教室から去っていってしまった。う、裏切り者ォ。

朝のホームルームが終わり、終業式が行われる体育館へと、重い足に鞭打ち歩いた。なお、ホームルームと終業式の模様は割愛させてもらう。なぜなら、死ぬ程どうでもいいため。

そして帰りのホームルームの時間になった。小萌先生が夏休みについての注意をしている。そして上条さんは、ぐっすりお休み中であ

る。
俺は小萌先生の話を聞き流しながら、ラノベを読み始めた。あ、俺の前の世界の持ち物は寮の部屋に置いてあった。いやー、ギターとかいちいち買い直すのもなんだかなあと思っていたため、大変ありがたい。

「え～と、明日から始まる補習ですが、対象者は、上条ちゃん、青髪ピアスちゃん、黒澤ちゃん……」

「えぇ！？なんで！？」

「うぉっ！」

補習対象者にナゼか俺の名前が挙がったとき、大声を出して立ち上がったら上条さんが、びっくりして、起き上がった。
「び、びっくりしたのですよ～、黒澤ちゃん。突然立ち上がらないで下さいね～」

「あ、はい、すみません。……じゃなくて！なんで俺が補習に掛かってるんですか！？」

「それはですね～、黒澤ちゃんは昨日『外』から転校してきたばかりなので、補習を受けて遅れを取り戻すためらしいですよ～」

なんで伝聞型なんだ……？あ、上からの指示か。……上……上層部……アレイスター……あ！やっべ、アレイスターの存在忘れてた～！こ、これはまずい、すごくまずい！確かアレイスターって学園都市中を監視してるんだったよな！？能力の使用を見られたんじゃ……。

「あの～、黒澤ちゃん？大丈夫ですか？どこか具合でも悪いのですか？」

へ？……今の俺の状況を整理してみよう。

頭を抱え込み、しゃがみこんでいる俺。そしてクラスメイトからは奇異の目を向けられている。

（ちょ、なんか既視感が……）

「黒澤ちゃん、具合が悪いなら保健室に行ったほうが……」

「いえいえ大丈夫です！問題なしです！」

なんか小萌先生が泣きそうだ……！これはおそらく、クラスのみなさん（主に男子）から、凄まじい視線を……、

『ギンッ！！』

ぐはあ！ま、まじで死ねる……。こ、ここはなんとか小萌先生が泣くのを阻止しなければ……。さもなくば、死！！

「本当に大丈夫です！」

「本当に本当に？」

「本当にほんとうにホントに！」

「よ、よかったですよ～」

ふう、任務完了だ大佐！

「（よかったな、真也。小萌先生泣かしたら、クラスのみんな、主に男子から嬉し楽しの鬼ごっこが待ってるぜ）」

「（その鬼ごっこは恐怖しか感じないだろ！？）」

起き上がった上条さんが話し掛けてきたため、それに応答していたら、ホームルームが終わったようだ。

「きりーつ！さようならぁ！」

日直の掛け声とともに、たった二日しか登校していない一学期が終わった。あ～あ、アレイスターの件も大変だが、なによりも補習のせいで遊び放題の夏休みが削られた。サ・イ・ア・ク・だー！

「真也、帰ろうぜ」

「ん？ああ、分かった」

上条さんからお帰りのお誘いを受けた。

いや～、上条さんと帰れるなんて、感激だ！昨日は運ばれたが……。

「あ～あ、明日からどうしよう」

こんなことを言っている上条さんに絶望の言葉を掛けてやろう。

「まあ、明日からよろしくな？」

おお、見事に固まってるなぁ。

「……へ？真也さん、それはいったいどういう意味でせうか？」
「ハハハ、モチロン決まっているじゃないか。キミが補習対象者だということだよ」
ん？なんかピキィッていう音が……。
「そ、そ、そんなこと聞いてませんよー！？」
「ああ、お前夢の世界に行ってたからな。聞こえなかったんだろ」
「ぐぅ！し、信じないぞ、そんなことは、絶対に信じないぞ！」
ふむ、まだ諦めてないのか。まあ、今からその小さい希望も無くすがね……。
「なら、あっちにいる小萌先生に聞いてみろよ」
「お、おう……」
喉をゴクリと鳴らし、小萌先生に聞きに行く上条さん。その姿は……、
とても憐れだった。
うん？おお、負オーラが増してきたぞ。あ、何かが砕ける音が聞こえた。
話を聞き終えた上条さんがこちらにきた。第一声は、
「ふ、不幸だ……」

想像通りの言葉ありがとう。

「どうせ俺は落ちこぼれの無能力者ですよ～」

……何処に逝ってるんだ？

「まあ、とりあえずよろしくな」

「うううぅ……」

使い物にならない上条さんを引っ張って、学校から出た。

「っは！一体俺は何を……てうぉい！引っ張るな！」

還ってきた上条さんを無視し、歩き続ける。

「お、お願いします真也さん！頼むから放して下さい！周りからの視線かキツイです！」

「……」

「無視しないでぇ！」

上条さん、そんなこと言いながら、自分から注目を集めるようなことをしてますね。

「ホントにたの、ぐげぇ！」

煩いのでゲンコツで黙らせた。……デジャヴュだ。しかし、どうしようか。確かこの後上条さんがヤケになるはずだったが……。

ん？
「お～い、上条。大丈夫か～？」
「……」
「返事がない。ただの不幸な屍のようだ」
「不幸ってなんだよ！いや、適してますけどね！」
「……ほう？」
「あっ！？」
「カミジョウくん？どういうことかな～？」
上条さんが起きていると気付いたため、カマをかけてみたら、まんまと引っ掛かったな。
「え、えと、これは、その……」
「まあいい」
「え？いいの！？」
上条さん、キャラ変わってるよね……。
「ああ。そんなことより、ヤケ食いしたくないか？」
「ヤケ食い？」
「俺達は補習という魔の手により、夏休み（至高の時）を奪われた

者だ。この怒りを何かにぶつけたいとは思わないか？」

「ん～、でも一学期分のサボりを取り返せるなら俺は別に……っがフゥ！！」

まったく、聞き分けのない子供だな。

「カミジョウクン、キミハソウデモオレハナニカニアタリタインダヨ。

ツキアッテモラオウカ？」

「け、けけけ結局お前が不満なだけじゃねえか！？俺まで巻き込むなぁぁーーー！！」

そして百人中百人が不幸な人と答えるであろう不幸少年上条当麻は、転校生の黒澤真也により不幸ルートに入って行った……。

「ここに入るか。つーか地獄ラザニアってなんだよ……」

俺と上条さんは、御坂美琴こと電撃ビリビリ少女が不良集団に絡まれる店の入口にいた。

まあ、俺はスルースキルを発動するけどね。会った瞬間電撃飛ばしてきそうだし。

バチバチィ！

そうそう、こんな感じで……って！？

「見つけたわよぉ～！」

振り返ると御坂美琴の姿が。そして振りかぶって……電撃槍が飛んできた！

「ぬぉわっ！？上条、出番だ！！」

「はい？ってぬぉわ！？」

上条さんが右手で電撃を打ち消した。リアクションが一緒だな。ていうかそんなことより……。

「おいビリビリ！危ねえだろうが！」

上条さんが御坂美琴に文句を言っている。

「そうだな。ここは店前だ。外していたら無関係の人まで危害が及ぶ。

もうちょっとよく考えて行動するんだな、お子ちゃま」

「お、おい馬鹿！そんなこと言ったら……」

御坂美琴が肩を震わせている。なんだ？正論を言われたから恥ずかしいのか？

「ええ、そうね……確かにここでの能力使用はまずかったと思う

わ……でもね……」

御坂美琴が帯電し始めた。

「Ｗｈｙ！？注意しましたよね！？能力使うなって！？」

「ええ、ここでは使わないわ。だから河原に行きましょう」

「え、なんでそうなる？」

「アンタの言い分はつまり、人がいないとこなら戦ってもいいということよね？」

「なんでそう解釈する、お前は！？

俺が言いたいのは、能力による喧嘩はダメということだ！このビリビリお子ちゃま！」

「ちょ、真也、それ自分で自分の首を絞めてるぞ……」

「こんの……二回もお子ちゃまって……！しかも二回目はビリビリ付き……！！

オーケー、死にたいのね？楽に死なせてあげるわ……」

「ちょ、ビリビリ、こいつは無能力者だぞ！？勝敗なんて目に見えて……」

「この前は引き分けに終わったからね！今度はしっかり焼いてやるわ！」

「ちょ、ま、ふ、不幸だぁぁーーー！！」

御坂美琴が俺を引っ張って歩きだした。上条さん、ヘルプミー！！

「す、スルーされた……」

おいいいぃ！不幸少年もスルーされるのは堪えるのかー！

場所は変わり、河原。成り行きで御坂美琴とバトることになった。

あ～、メンドイ。

「そこのアンタ！審判よろしく！」

御坂美琴が上条さんに審判役を押し付けている。

「ちょ、待てよビリビリ中学生！」

「ビリビリ言うな！」

「そんなことより、アイツは無能力者（レベルゼロ）だぞ！？本気でやったら死んじまうぞ！？」

「はぁ！？あれは明らかにレベル５はあったわよ！」

「へ！？真也、能力使えるのか！？」

う、うるさい……。周りに誰もいないから迷惑にはならないけど、もう少し音量を抑えてくれ……。

「ん、まあ使えるが。能力測定の時は演算が狂ったからな」

「……真也って、実は賢いのか？」

「さあ？」

「さあって……」

上条さんが脱力している。

「そんなことはどうでもいいわ！早く構えなさい！」

「はいはい。ハァ……メンド。上条、審判ちゃんとやれよ。あと危ないと思っても邪魔するな」

「なんでだ？」

「生意気な中学生に躾をするためだよ」

「……やりすぎるなよ」

どんな時も他人の心配をする。流石は上条さんだな。

「分かってる」

「お話は終わったかしら？」

おいおい、そういうのは負けフラグだぜ。

「ああ。じゃ、始めるか」

「はっ、始め！」

うおーい！ここは普通もう少し会話してから喧嘩に入るんじゃないか！？

「いくわよ！！」

御坂美琴が例の如く電撃槍を飛ばしてきた。しかも高電圧。

「はっ、ちゃんと本気でこいよ、ビリビリお子ちゃま？」

こちらも例の如く同じ威力の炎槍を飛ばした。これにより双方の攻撃は相殺された。

「まだまだぁ！！」

うげっ！？連続で撃ってきやがった！そんなにビリビリって言われるのが嫌なのか！？

「チッ、だが遠距離攻撃では俺に届かねぇ！」

右手を突き出し、手の中心から円形の炎を出してそれを拡大。

「炎盾（フレイムシールド）！」

炎盾は御坂が放った電撃槍を受け止め、飲み込んだ。
「なっ！？飲んっ……！」
「生憎と電撃は嫌いでね！」
炎盾から炎を纏っている電撃槍を飛ばす。
「なぁっ！？」
驚いてばっかりだな、ビリビリお子ちゃま。
御坂美琴が電撃槍を飛ばし、相殺した。
「アンタ今ビリビリって言ったでしょ！」
御坂美琴が怒気を含んだ声を発した。
というか何故ばれた！？
「まどろっこしいわね……」
御坂美琴が何か呟いたと思ったら砂鉄剣を作りだした。
「芸がねぇな！その攻撃は通じない！」
こちらも炎剣を作り、構えた。
「さあ、それはどうかしらねっ！」
こちらに走り込み、砂鉄剣を振り落とした。

「効かんわ！」

炎剣で防ぎ、砂鉄剣を払い落と――――、

「なにっ！？」

御坂美琴は砂鉄剣を分解した。

何故分解した？と思ったが、その答えはすぐ判明した。

「私のレベル５という肩書きはダテじゃないわよ！」

分解されて散らばった砂鉄が御坂美琴の能力により、複数の砂鉄剣を形作った。

「これで終わりよ！」

普通の能力者ならここで諦めるだろう。そう、普通、だったらな。

能力名：電撃使い

レベル：５

砂鉄剣が俺に向かって飛んでくる。ご丁寧に直接体には当たらないような場所を狙っている。

間に合うか――

砂鉄剣が動きを止めた、かなりギリギリのところで。

「ふう、危ない危ない。これを食らってたら負けてたな」

「くっ、あともうちょっとだったのに……！」

御坂美琴が拳を握りしめ、歯ぎしりしている。
そういえば幻想殺しはコピー出来たのだろうか？やってみるか。

能力名：幻想殺し
効果範囲：――

ぐうっ……！コピー自体は出来ていたが、設定する時に頭に強烈な痛みが走るな……。
しかも、レベルではなく、効果範囲か。
ん？あれ？これ、体全域って設定したら超絶チートじゃね？

効果範囲：体全域

できちゃったーーー！！

「何したか知らないけど、どんどん行かせてもらうわ！」
フッ、御坂美琴よ。たとえどんな攻撃をしかけようとも、今の俺には無意味だぜ！
御坂美琴は帯電し始めた。まるで某電気鼠だな。

「ハアァァァ！」

御坂美琴は帯電していた電気を放電した。
だが残念。今の俺に能力は無力と化す。
放電された電気が俺の皮膚に触れた瞬間――、

バリィン！

というガラスが割れたような音が響いた。

「なっ！？今のは幻想殺しで能力を無力化した時の音！なんで真也が！？」

「ん？幻想殺しも立派な能力だぞ上条？」

「だけど俺はシステムスキャンでは無能力者（レベルゼロ）という結果だったけど……」

う、咄嗟の言い訳ではごまかせなかったか……。

「そ、そういう能力なんじゃないか！？ほら、能力って分かってないことが多いし！」

……しくった、あわてふためいた声で言ってしまった……。誰がどう見ても怪しいだろ……。

感づいてないか上条さんのほうを見ると……、

「成る程、確かにそうだな……」

上条さんは馬鹿だった！

いや、元から馬鹿か。補習に引っ掛かってるし。

「なあ真也、今すごく失礼な事を考えてなかったか？」

馬鹿でも勘は良かった！

あれ、そういえば御坂美琴はどうしたんだ？全然攻撃して来ないが。

御坂美琴が居る所に目を向けると、そこにいたはずの御坂美琴がいなかった。

能力者対能力者だけとはいわず、闘い（喧嘩）では相手が何処に居

るかを常に把握していなければマズイが、如何せん相手はガキ。しかも今の俺は完璧超人ならぬ完璧チートだからな。いや、完璧は言い過ぎか。
ともかく俺の負ける確率は０だ。銃火器ならともかく、ただのレベル５に負けるつもりはない（幻想殺し使える前は一方通行には負けると思っていたが）。
「そこにいるバカと同じ能力を持っているなら好都合！それの対策は考えてあるわ！」
ということを口走りながら、御坂美琴が後ろから現れた。
にしても対策か。おそらく直接電流を流そうとするのだろう。
俺の予想通り、御坂美琴は俺の右手を掴んだ。
「捕った！」
……。
何も起きない。しかも御坂美琴は焦っていた。
「あ、あれ！？なんで流れないの！？というか能力が使えなくなってる！？」
「……あ～あ、興ざめだ」
「え？」
俺は御坂美琴の首に手刀を放ち気絶させた。
「あ、おいビリビリ中学生！？」
上条さんが御坂美琴に駆け寄って容態を確認している。

「大丈夫だ、上条。気絶させただけだ」

「それは分かっているけどさ。いやしかし、ビリビリ中学生はレベル5だぞ？それをこんな簡単に……。しかも多重能力者（デュアルスキル）なのか……？」

やっぱりこういうのは目立つのかね？あまりよろしくないな。

「ビリビリお子ちゃまも同じことを言っていたが、俺はそんな大したモンじゃない。ただのしがない高校生さ」

それでも納得できていないのか渋い顔をしている上条さんに言葉をかける。

「ああ、上条。ビリビリお子ちゃまを家に帰してやっといてくれ。いや、寮か？まあ、どっちでもいいか。とにかくよろしく」

「え……それはつまり、こいつを運べと？しかも女子寮に？間違いなく突き刺さる視線を受けると思いますが？」

「うん、ガンバレ」

「ガンバレ、じゃねえよ！つーかこういうのは気絶させた方がやるんじ」

全速前進だ！！

しんやはにげだした！！

「こら逃げんなあ！」

フッ、上条さん逃げるが勝ちさ。
そして俺は無事に逃げ切り、家に帰って明日から始まる魔術師の戦いに備えた……。

禁書目録（インデックス）！（後書き）

どうでしたでしょうか？
未熟者ですが、感想など大歓迎です！
また、能力も募集中です！
これからも「とある魔術の能力変化」をよろしくお願いします！

禁書目録（インデックス）２！（前書き）

長らくお待たせ致しました！更新再開です！
活動報告では３月中旬まで更新停止と言いましたが、テストが終わったので執筆しました。

今回は短いです。それと最後、自分でも何言っているか分からなくなってしまいました……。
おかしいと思ったら遠慮せず言って下さい。

……『悪』よりも『善』を書く方が難しい……。

禁書目録（インデックス）２！

俺は今赤髪タバコエセ神父をどう虐めるか思考中である。
一応根は良い（？）人間ではあるのだろう。だが、俺はああいうのは苦手だ。見た瞬間痛めつけたくなる。それほど苦手なのだ。
そうだ、『赤髪タバコエセ神父』と一々言うのはメンドイから次からはストレートに『変人』と呼ぼう。うん、それがいい。あ、『変態』でもいいな。ううむ、悩む……。
そんなことを考えていると、上条さんが起きて、インデックスと会う時間にあと３０分を切っていた。
「やべっ、ちゃっちゃっと朝飯食うか」

俺は料理は上手いと自負している。
前の世界では食事は必ず自分で作って食べていたから、自然と腕がついてきたし、特に理由はないが自分からも勉強してたからな。
そんなこんなで朝飯を食べ終え、上条さんとインデックスの会合の時間を待った。ちなみに暇潰しはエレキギターを弾いている。朝早いのでアンプにはつないでいない。なお、原作では御坂美琴のせいで電気が止まっていたが、やられる前に倒したため被害はない。
ギターを弾いていたら無性に『けいおん！』を見たくなってきた。
弾いていた曲が『けいおん！』のＥＤ曲だったからかもしれないが。
あーーー、マジで見たい！だが見る時間がない！くそっ、どうしよう！？ほっとくか！？いやそれはまずいだろう！？だが見たいというのも事実！しかしならばどうすればいい！？
……ああ、すっかり忘れていた。俺は……欲望の前にＹＥＳと言える人間だった。
結局俺は『けいおん！』を見始め、補習開始時間まで見入ってしまった。

「黒澤ちゃ～ん？なぜ補習初日から遅刻してきたんですか～？」
傍から見れば、小学生が自分より二回り程大きい人を叱っているというなんとも奇妙な光景である。
「え～、それは……ちょっとした事情があ」
「それではその事情を説明して下さい」
小萌先生は俺の言葉を遮り、その小さい体からどのようにして、そんな声が出るのかと問いたくなるような低い声で言った。
「うっ……、て、テレビを見ていたら思わず見入ってしまい、気付けばこんな時間に……」
俺はもう汗だくだくである。もし、ひょんなことから小萌先生を泣かしたら、クラスメイト全員が俺を殺しかねないのだから。
……え？そんな大したモンじゃないだろうって？甘い、チョコレートアイスにガムシロップ＆ハチミツをかけて食べるくらい甘い！！つーか自分で言っておいてなんだが、これ食っても味分からないよな？ま、それだけ甘いのさ。
昨日片鱗を体験させてもらったからな。元の世界の女友達に会うぐらい恐かった。
……うん、なんでアイツのことを思い出してしまったんだ……。

やばい、冷や汗が出てきたぜ……！
アイツのことは特に言う必要もないだろう。俺は『転生』してしまったんだからな。うじうじ過去のことを気にする時間なんてない。今が大切だ。
「……黒澤ちゃんは、私の授業より、テレ、ビのほう、が、重要な、んですか……？」

あれぇ？なんか泣きそうですよ？おっかしい～な～、こうならないようにしたは『ギロッ！！』

……俺、死ぬの？

「うっ、うっ、もういいのです、席に着いて下さい……」

フッ、補習が終わった瞬間地獄になるな、これは……。鬱だ……。
俺は顔を俯けながら席についた。横では上条さんが外を見ている。
……あ、八つ当たりしよう。そうしよう。え？最低だって？ありがとう、俺には褒め言葉だ。
善は急げだ、早速行動に移すとしよう。

「センセー！上条くんが授業を無視して外を見ています！」

手をぴしっと上に伸ばし、大声で言った。

「なっ！？俺まで巻き添えにするな！ってあれ？真也じゃねえか。いつからいたんだ？」

「……」

俺泣くよ？泣いてしまうよ？

「そういえばお前、昨日はよくも押し付けたな！いろいろ大変だったぞ！」

何があったんだろう？もしかして白井に会っちゃった？だとしたらマズイな……。白髪幼女性愛者の事件の時に会うはずだったが……。あ、幼女性愛者は一方通行（アクセラレータ）のことである。

「ふぅん、たとえば？」

「う？ん～、御坂の後輩に会ったな、ツインテールの」

ワァオ、当たってほしくなかったな。

「それになんかめちゃくちゃ怒ってたぞ」

上条が御坂の想い人だということを知るのはまだのはずだ。何故だろう？

「なんだったんだろう？」

こっちが聞きたいよ！

「ま、そんなこと気にしてもしょうが……」

上条さんの動きがぴたっと止まった。俺が訝しがった視線を送ると、俺にだけ見える手のジェスチャーで教壇の方を指さした。嫌な予感がしながらそちらの方を見ると……、

小萌先生が泣いていた。

「ううっ、ふっ、二人とも今日はコロンブスの卵ですよぉ、ぐすっ」

Ｏｈ、死亡フラグ確定。

『ものどもぉ！小萌先生を泣かした奴らに制裁をぉ！！』

俺と上条さんは同時に教室の出口へ駆け出した。

「あ！かみやんと新入りが逃げ出したにゃあ！」

土御門がいち早く俺達の逃亡に気付いた。

『待てやコラァ！！』

「待てと言われて待つ奴はいないわ！」

走りながら叫ぶ俺。横には上条さん。後ろにはクラスの補習組。俺と上条さんは同時に叫んだ。お決まりのあの言葉を！

「「ふ、ふこーだー！！」」

悪夢の鬼ごっこで無事に逃げ切り、場所は河原。昨日ビリビリお子

ちゃまと喧嘩した場所だ。俺と上条さんはここで休憩を取っていた。
「あー、にしても、死ぬかと思った……」
「ホントにな……」
「つーかアイツらなんなんだよ……。ロリコンなのか？」
「……否定出来ないというのが悲しいな……」
そんなことを話しながら、話題は今後の方針へ変わる。
「はあぁ、しかし、俺達なんだかんだいって補習すっぽかしてしまったな」
上条さんが深いため息をつきながら言った。
「明日が怖いな」
反面俺はあっけらかんとした声で言った。
「なんで明るい！？小萌先生が泣いたらまた悪夢の鬼ごっこが始まるぞ！？」
「うん、面白そうだからわざと逃げたけど、疲れるからこれから能力使うわ」
隠すとかめんどくさくなったよ。
「そういえばお前の能力って何なんだ？」

「ん～、めちゃくちゃ驚くと思うぞ」

「そりゃまあ、身体測定じゃ無能力者判定だったのに、昨日は思いっ切り使っていたからな」

まあ普通疑問に思うわな。

「特殊なんだよ、俺の能力は。上条の幻想殺しも似たようなもんだろ」

「……なあ、ちょっと聞いていいか？」

「ん、なんだ？」

「……真也は何処でこの右手のことを知ったんだ？」

……あれ？

「前にも俺の力が幻想殺しって分かっていて俺を盾にしたよな。それに御坂と闘った時は……幻想殺しを使ってたな」

……喋り過ぎたか。

まさかこうなるとは思わなかったな。

上条さんはバカだと思ったんだが。

「……俺の能力は『能力変化（スキルシフト）』。視界に入った能力をコピーし、自由にレベルを変えられる。今はそれだけしか俺も分からないな」

「……」

ふむ、大事なのは幻想殺しの方か。だが……、

「上条、世の中には知る必要がある事と知る必要がない事がある」

「ッ！！」

「まあ、今は話せないが後少しばかり時間が経てば教えられるかもな」

「……なあ、俺達、友達だよな？」

めずらしいな、上条さんがこんな弱気になるなんて。
まあでも、当たり前か。元いた世界じゃこの世界は二次元だけど、こちらじゃ立派な三次元だ。
二次元は所詮幻想だ。人はアニメやマンガを二次元と呼ぶが、人の想う夢などもまた、二次元的な存在だ。
恐らく元いた世界の禁書読者は、上条さんは『強い人』だと思うだろうが、それは二次元の中だけだ。ここは三次元。現実（リアル）だ。

「まだ会って少ししか経ってないけど、俺達は立派な友達だ。それを疑ってどうするんだ、上条？」

俺は苦笑しながら言った。

「……そうだな、そうだよな。変な事言ってすまねぇ、真也。忘れてくれ」

上条さんも苦笑しながら言った。

「んじゃ、俺は用事があるから一旦ここでサラバだ」

「おう、俺も帰るわ」

「「じゃあまた後で！」」

さて、本当はするつもりじゃなかったが、原作介入するか。

……止められる悲劇を、止めるため、

そして、友のため……。

禁書目録（インデックス）２！（後書き）

誤字・脱字がありましたらご報告お願い致しします。

禁書目録（インデックス）３！（前書き）

お久しぶりです、リスペクトです。
皆さん、地震は大丈夫でしたでしょうか？無事である事を願ってます。
また、地震により亡くなった方に御冥福をお祈り致します。
最後に、重要なお知らせがあるので、後書きもご覧になって下さい。

上条さんと別れて場所はとある路地裏。
俺は、一方通行（アクセラレータ）を探していた。

「（……もう『絶対能力進化』計画は始まっているが、実験を凍結させることは可能だ。
それにこれから起こる悲劇を止めるために、早めに一方通行の協力が欲しいところだしな）」

そんなことを考えながら歩いていると、御坂らしき人物を発見した。

「（今の時間軸では御坂は実験のこと知ってたっけ？）」

物陰に隠れながら目を細めて観察（不審者オーラ全開）すると、頭にゴツいゴーグルを付けているのが分かった。

「（御坂妹か……。今から実験か？）」

「よォ、お前が次の相手かァ？」

突然誰かの声が聞こえた。ま、一方通行だろうけど。

「はい。ミサカの検体番号は八九六五号です。と、ミサカは返答します」

ん～、事務的口調は苦手だな。やっぱりお堅い人より元気な人の方がいいよ。

「……あ～ァ、俺が強くなるための『実験』に付き合わせている身で言えた義理じゃねぇけどよォ、ちっとは何か考えたりしねェのかァ？」
「何か、という曖昧な表現では分かりかねます」
「……チッ、つまんねェ奴だ。
まァいい、実験の時間まであとどれくらいだァ？」
「現在時刻は午後十二時五十八分三十六秒。
あと一分二十四秒で実験を開始します」
そろそろ出るか。出来れば御坂妹が傷付く前に任務を遂行しないと。
「こんな所で何やっているんだ？」
「あァ？」
顔に笑みを張り付けながら物陰から出ると、一方通行が不機嫌そうな顔をこちらに向けてきた。
「おイおイ、この場合はどうすンだよ。この『実験』は一般人に知られちゃまずいンじゃねェの？」
「はい、とミサカは短く返答します」
「しかたねェ、口封じでもするかァ」
フッ、一方通行よ。今の俺は全身に幻想殺しの能力が付いている。
触れられても大丈夫だぜ。
あ、能力もコピーしよう。やっぱり欲しいよね、こういう能力は。

「そンなわけで悪ィけど……死ンでくれ」
一方通行は足を地面に叩きつけ、地面を破壊。空中に跳んだ石に、ベクトル操作で風を吹き付け凄いスピードで飛ばしてきた。
……あ、幻想殺しじゃ物理攻撃防げない。
「そおぉぉぉい！！」
危ねぇぇぇ！紙一重で避けたぜ！
「ハッ、いつまで逃げ回れるかなァ？」
一方通行は先程の攻撃を三倍にして放ってきた。
「ぐはぁッ……！！」
ギリギリで避けられた攻撃が三倍になれば、避けるのは不可能である。
俺は体の各所にまともに攻撃を食らった。
「ああン？もしかしてお前、策がねェのに俺に突っ掛かってきたのか？
俺が誰だか、分かってるンだろォ？」
「……学園都市最強の超能力者、だろ。だが、その肩書きも俺が潰してやるよ。一方通行」
「クックッ、お前バカだろォ？俺の能力知ってンだろォが？」
「あらゆる向きを操る能力、だろ？そのおかげで、お前は攻撃を食らわない。

でもな、弱点はあるんだよ。
一つ。お前も人間だからな、酸素を奪われるとキツイだろう。
もう一つはお前は喧嘩の方法を知らないということだ。もし能力を無効化されたら、お前は勝てないだろう」

「……ククッ、スゲェスゲェ。そこまで解析して来るとはなァ。だがよォ、それは弱点とは言えねェなァ。酸素を無くすのは至難の技だぜェ？
それに能力を無効化するなんてモンは持ってねぇだろ？」
一方通行は拍手をしながら、愉快そうな声で笑いながら言った。

「なあに、やってみれば分かるさ！」

俺は駆け出して、一方通行に近づいた。
一方通行は、遠くにいたら物理攻撃を使うが、近接攻撃では確か物理攻撃を使わなかったはずだ。
つまり、殴り合いになれば確実に勝てる！

「オオオォォォ！！」

右ストレートを放ち、ヒット！……したかと思ったが、それは瓦礫に阻まれた。

「なっ……！？」

いったい何処から！？と思い、周りを見渡すと、工事中のビルがあった。
「ケッ、俺の能力を分かっていて、しかも自信満々に突っ込ンで来るという事は一応あるンだろォ？
で、近距離攻撃ばかり仕掛けてくるってこたァ、その策は遠距離攻

撃には向いてないということだ。
なら、お前を手っ取り早く潰すには――――」

「ぬおおおぉぉぉ！」

ハッハァ！解説中に攻撃しないなんて、テレビの中だけだぜぇ！
再び右ストレート……と思わせて左！

「がフッ！」

砂利の嵐に巻き込まれ、不発。

「――――こうすンだよォ！」

一方通行が瓦礫を連続で蹴り飛ばした。
そしてその攻撃が全弾命中。

「ッ！！……」

あまりの痛みに声すら出せなく俺は倒れ付した。

「……クカカッ、俺に喧嘩を吹っ掛けっからこうなるンだよ」

一方通行が笑いながら立ち去ろうとしている。

「ま、て……」

意識が朦朧としてきた。それに目が霞む。だが、死ぬわけにはいかない。ここで一方通行を止めて、これから起こる事を防ぐ手伝いをしてもらわなければ……、

「……チッ、ワザワザ生かしておいたってのになァ。バラバラにしなくちゃならなくなっちまった。
ま、俺を恨むなら恨めよ。いくら恨んだって死んじまったらどうしようもねェがな」

……わざと殺さなかったのか……。やはり、完全に堕ちてはいないな……。

「さよならだァ」

一方通行が一際大きな瓦礫を俺に向けて落とそうとしている。
……意識が……。こういうのを……意識が沈むと、言うのだろう……。

そして、俺は気を失った……。

「あァ？」

不可解な現象に、一方通行は首を傾げた。
瓦礫が消えたのだ。壊れたわけでもなく、すうっと。空間移動（テレポーター）ではないだろう。空間移動をする時は少なくとも音が立つ。だとすれば座標移動か？
そして一方通行は殺そうとした奴を見て驚愕した。

「誰だ……テメェ……？」

奴がいた場所には黒髪黒目の女が立っていた。髪は手入れをしていなさそうで、所々跳ねている。服装は黒を基本としている。

「初めまして、一方通行さん。
私は名乗る程の者ではありません」

これといった特徴がない声だ。
そこから感情というものが感じられない。

一方通行は久しく感じていなかった恐怖恐怖を覚えた。
そう、学園都市第一位の超能力者であり、軍隊が掛かっても傷一つなく勝つ事が出来る一方通行が、だ。

「（どォいうことだァ？この俺が、恐怖を感じている？コイツは一体なンなンだ……？）」

「何者か、と言われても答える義務はありませんね」

「！！」

一方通行は自分の考えていた事を読まれた事に驚き、それと同時に戦闘態勢に入った。
一方通行にいつもの余裕はなくなっていた。

「私があなたを倒せば実験は中止になりますかね？」

「あ？なンでそンな事を聞く？」

「いえ、宿主の目的は実験を止める事ですから。それに従うのは当然でしょう？」

何故実験を知っているのか、男が実験を止めるつもりでいた事、宿主とはどういうことかなど、疑問はつきないが、それを解消しようとする暇はなかった。

なぜなら、女から凄まじい殺気が放たれたからである。

「！？」

学園都市第一位の超能力者、軍隊を相手にしても無傷で勝つ事が出来る一方通行が、恐怖を感じた。

これは、相手の女の異常性を示すには十分だった。

「私個人にはあなたに恨みはありませんが、宿主の望みなので、すいませんが死んで下さい」

「ッナメた口聞いてンじゃねェぞクソ女（アマ）ァァァァァ！！」

たとえ相手が何であろうと所詮人間だ。血流を逆流させれば、他の奴らと同じく死ぬであろう。

一方通行はこう考え、能力を最大に使い、猛スピードで突っ込んだ。

「……自分の能力にしか頼らないあなたの戦闘体型。

実に憐れですね。あなたみたいな人は能力を失ったら、そこら辺にいる人間にも勝てないでしょう。

体験させてあげますよ」

一方通行が女の首を掴んだ。

「（勝ったァ！）」

しかし、一方通行の思いとは裏腹に、女は死ぬ事はなかった。

「なッ……！！」

「随分と余裕ですね？敵を前にして動きを止めるなど、自殺行為ですよ？」

女の右手が一方通行の首を掴み返した。

「ガハァッ！（クソッ、どうなってやがる！？反射が機能しない！？）」

一方通行は焦りを顔に浮かべた。このままだと、確実に殺されるからだ。

「ふふっ、やはり恐いですか、『死』は。まあ、あなたが死んでも困るのは学園都市ぐらいでしょうし、問題ないですね」

女は、同性をも魅了するような笑みを浮かべた。

「さようなら、学園都市最強の能力者、『一方通行』」

女が左手の人差し指を一方通行の額に当てた。

「（グゥッ……！！）」

一方通行は死を覚悟し、目をつむった。

「（……？攻撃が、来ない？）」

一方通行は恐る恐る目を開けると、目の前にいたのは、ついさっきまで戦闘していた男だった。

「よう……一方……通行……無事か？」

「……あ？テメェはさっきの……？あの女はどこ行ったァ？（チッ、相変わらず能力は使えねェのか）」

一方通行は今だに首を掴まれたままだ。

「すまねぇな、ちと苦しいかもしれねぇが、我慢してくれ。手を離したら、殺しにくるだろ？」

「チッ……」

「まあ、俺の話を聞いてくれ。そうすれば考えは変わるだろうよ」

「あァ？テメェみてェな無能力者ごときが何を知ってンだ？つまンねェ事だったらぶっ飛ばすぞ？」

「まあ落ち着け。実に面白い話だと思うぞ？聞く価値はありだ」

男は指で丸を作り、にぃっと笑った。

禁書目録（インデックス）３！（後書き）

書き溜め作業のため、更新を一時的に停止します。
理由なのですが、一話一話書いていると、どうしても更新が遅れてしまうので、それならと、こういう決断に致しました。
再開は、最低でも二ヶ月以内です。その時になったら、たとえ途中でも、書き終えている所まで投稿します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7234p/

とある魔術の能力変化（スキルシフト）

2011年4月4日17時01分発行